

ぼくの愛する田舎の少女。

—体験版—

一幕
もしかして泊まるところが
ありませんか？

二幕
ハートウォームオプシヨン♪

三幕
今日はお泊めできません！

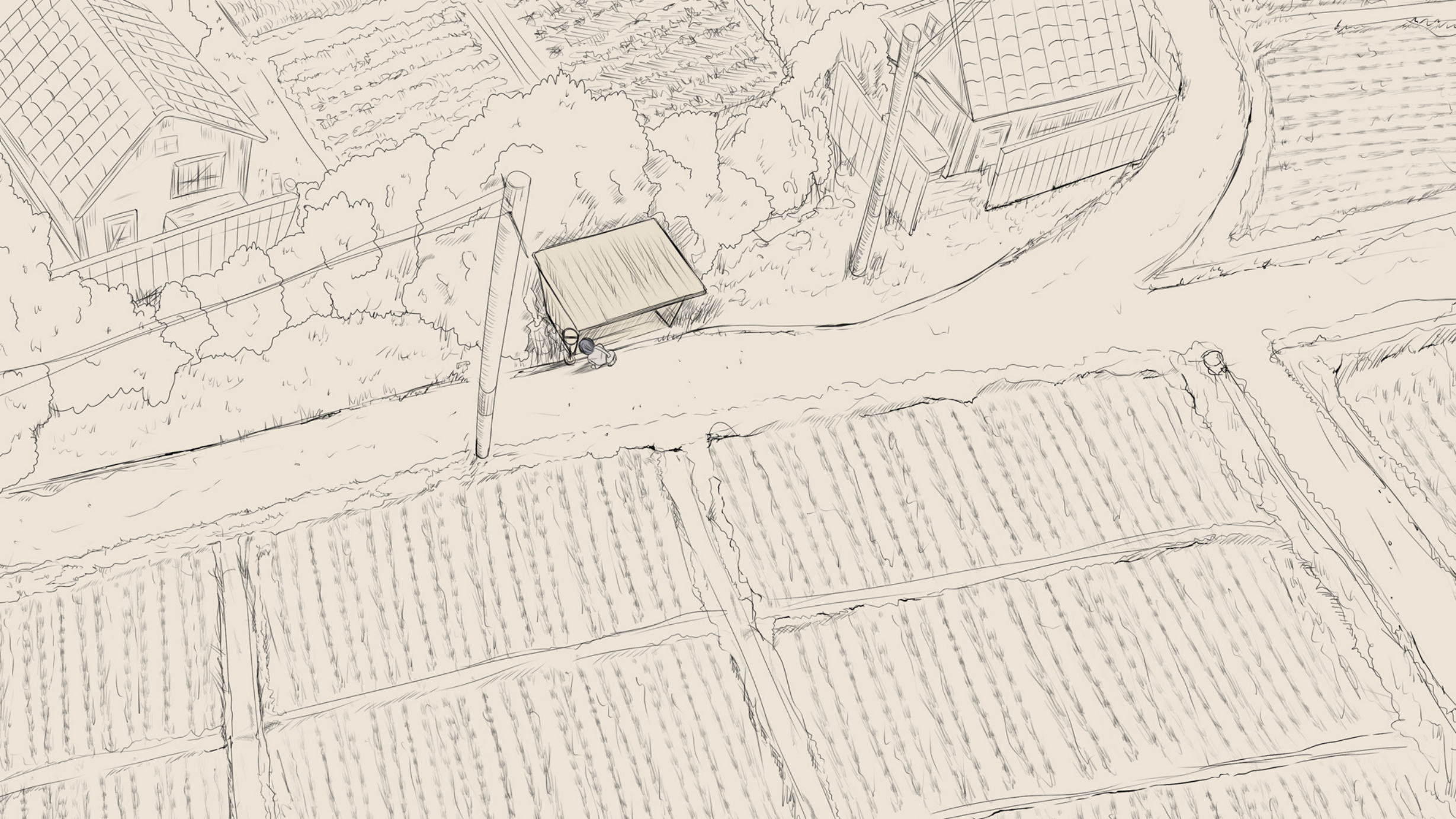
四幕
寝ない子どもこだ？
♥

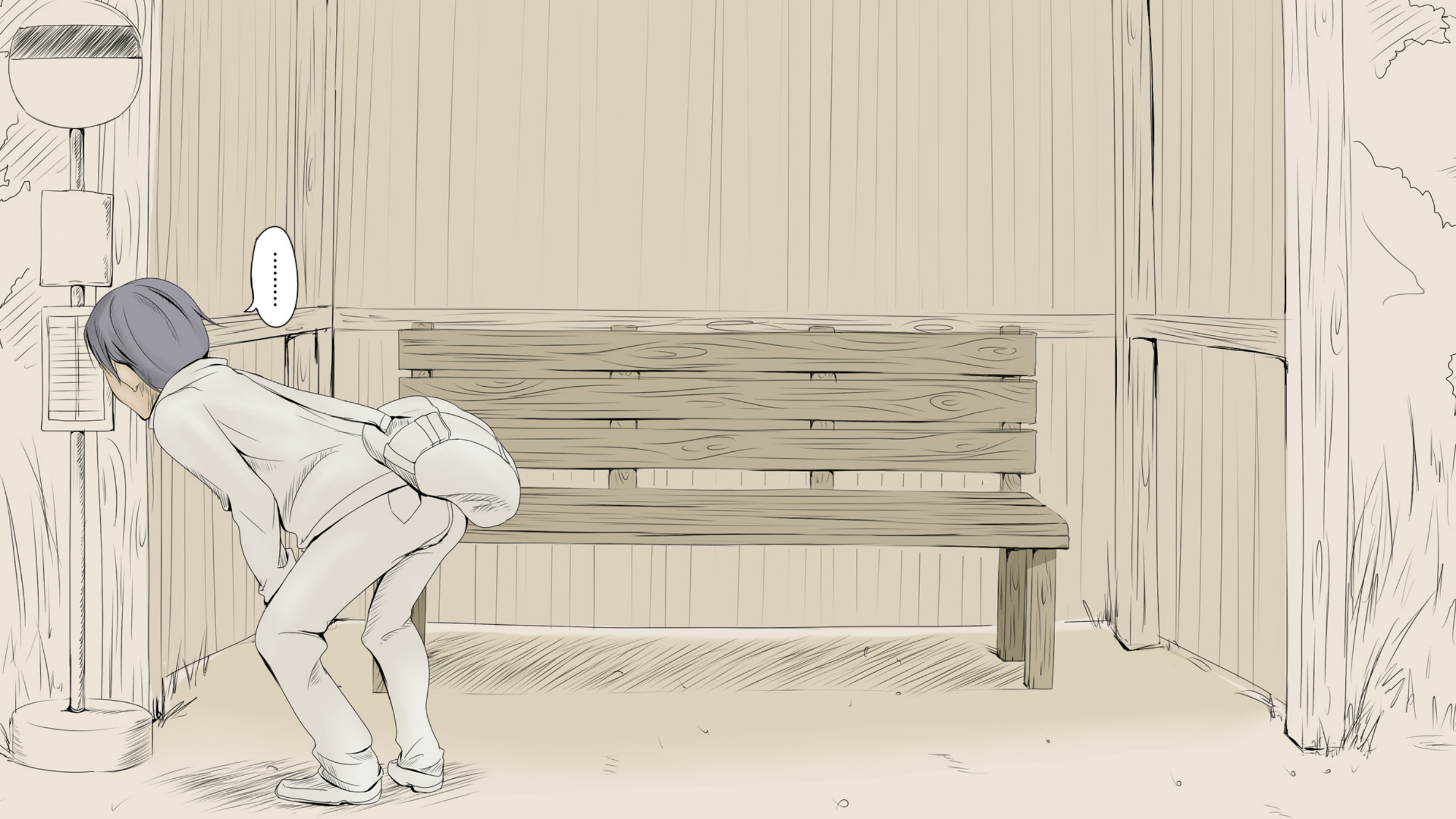
五幕
大しゅきクローズド
♥

終幕
夏休みはどんな予定？

一幕

もしかして泊まるところが
ありませんか？



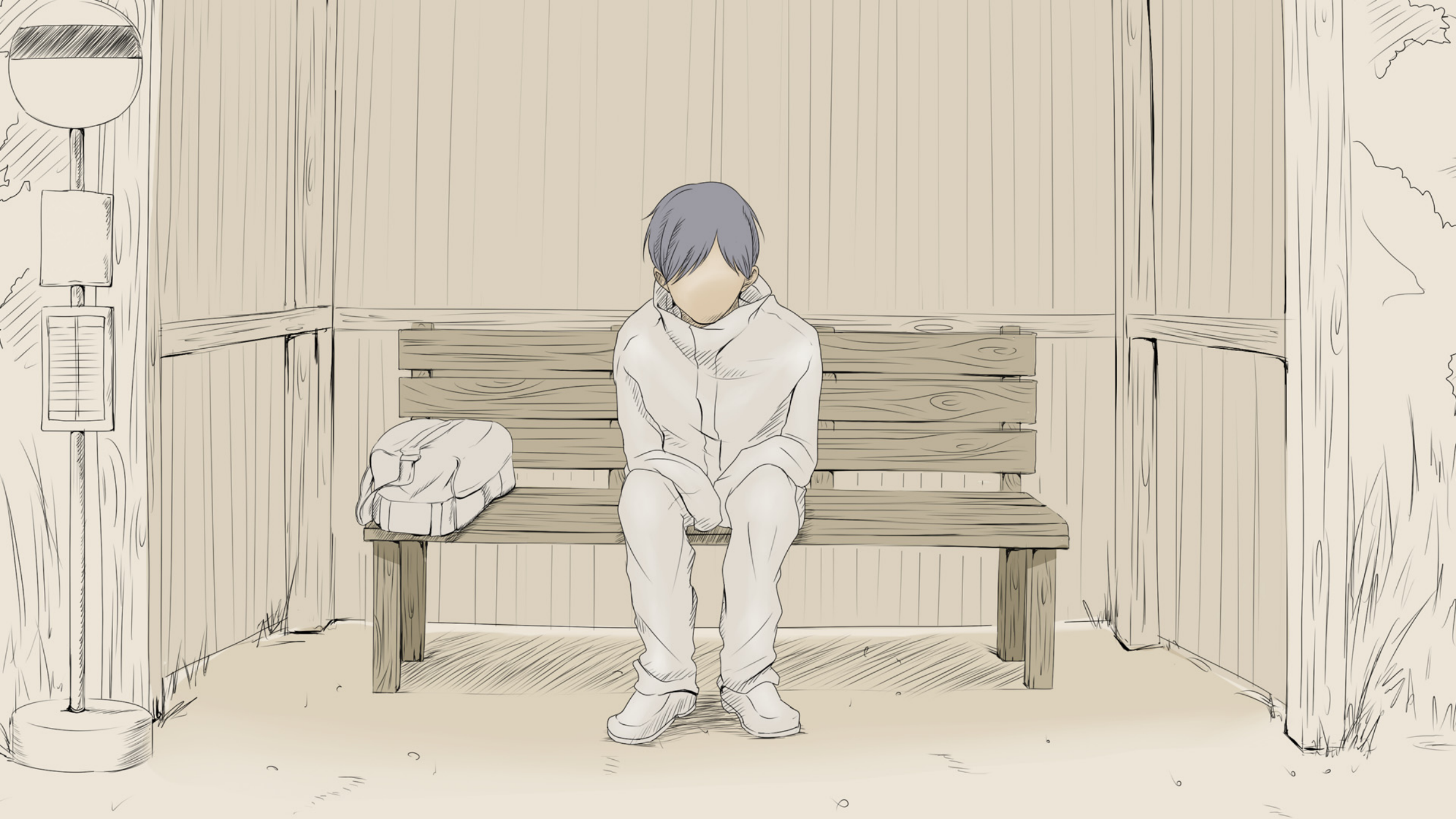


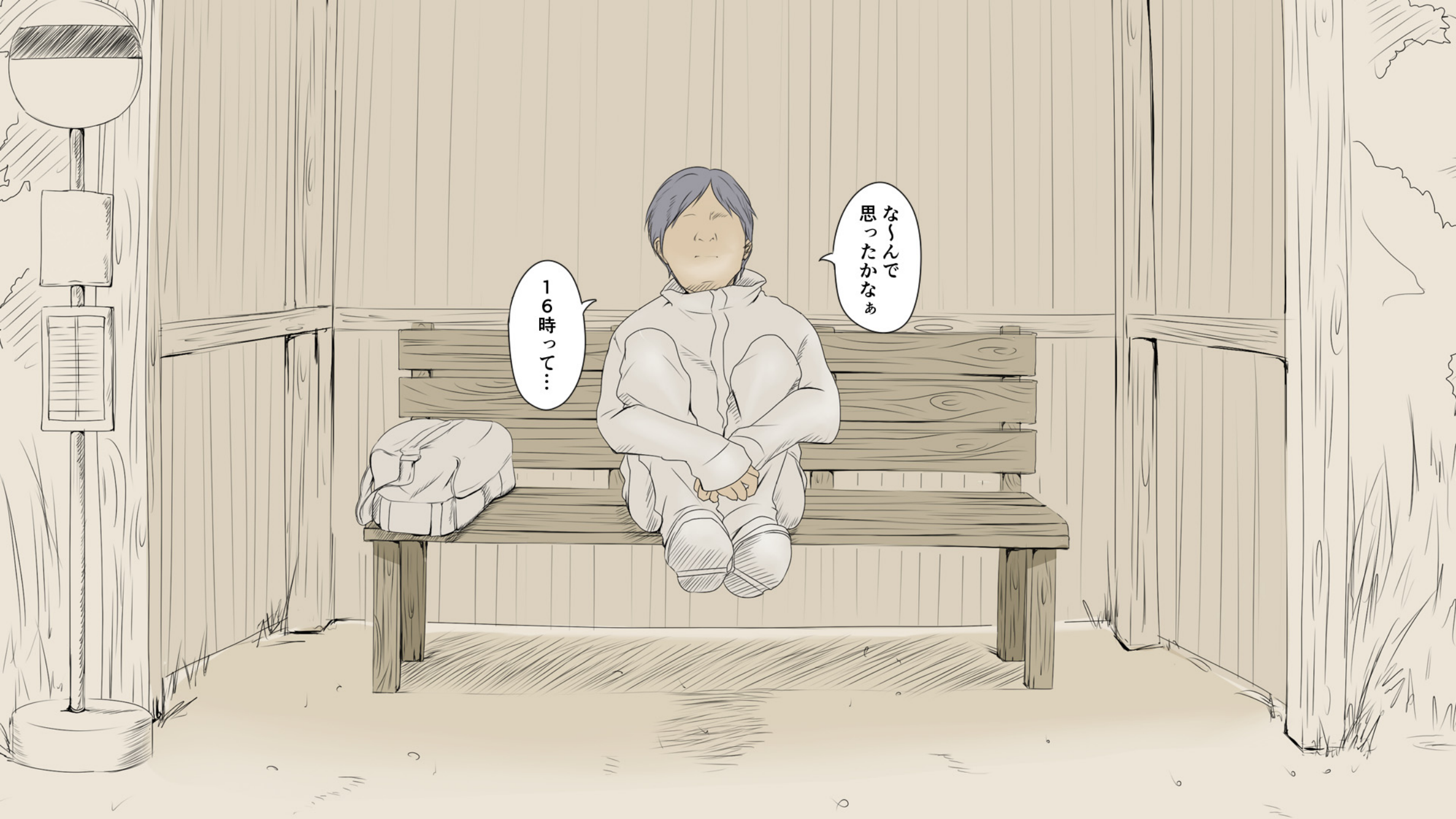
.....

14	
15	06
16	
17	

	上り	下り
7	15	
8		
9		
10		
11		
12	20	
13		30
14		
15	06	
16		
17		45

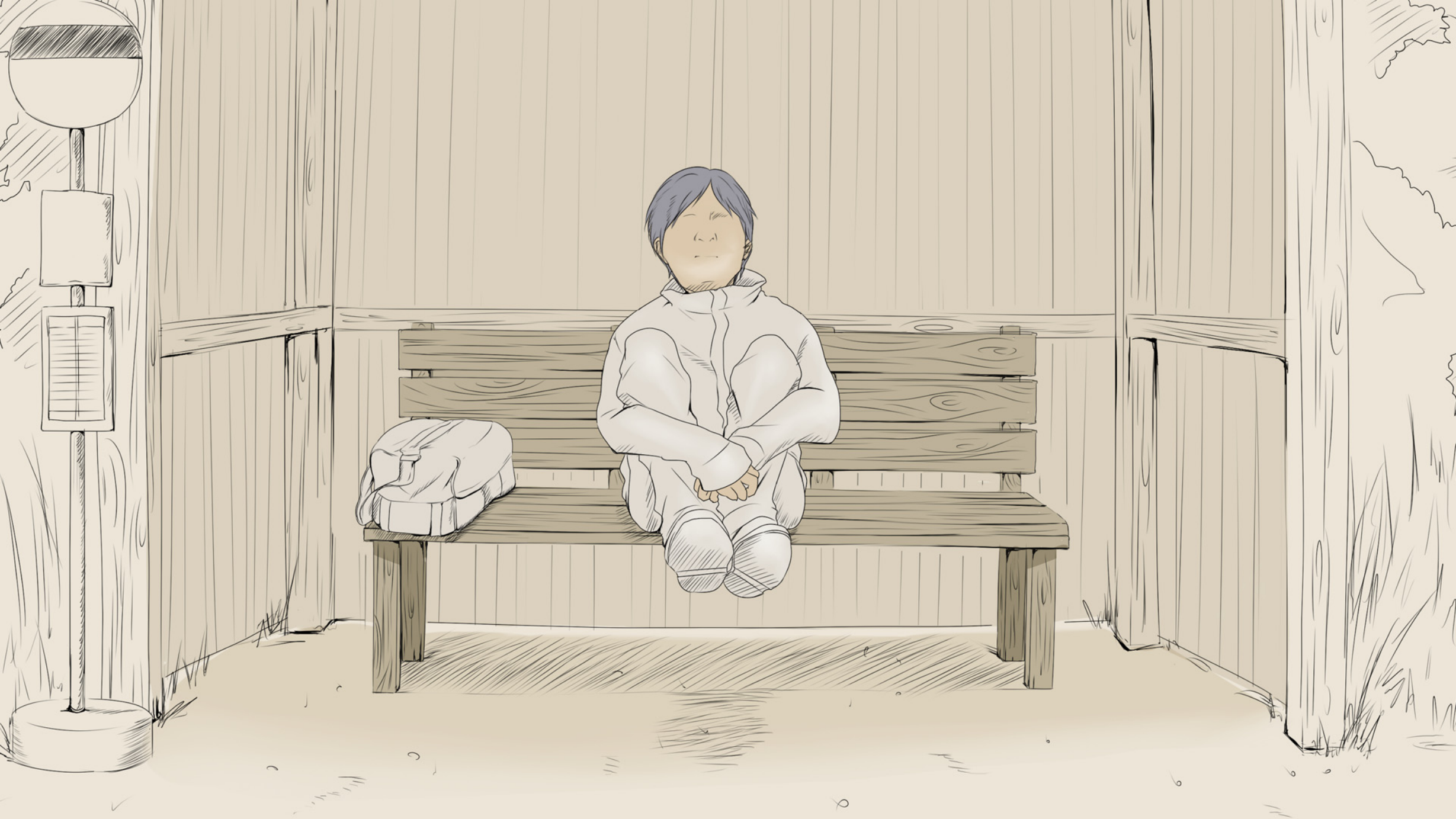
うっせ...

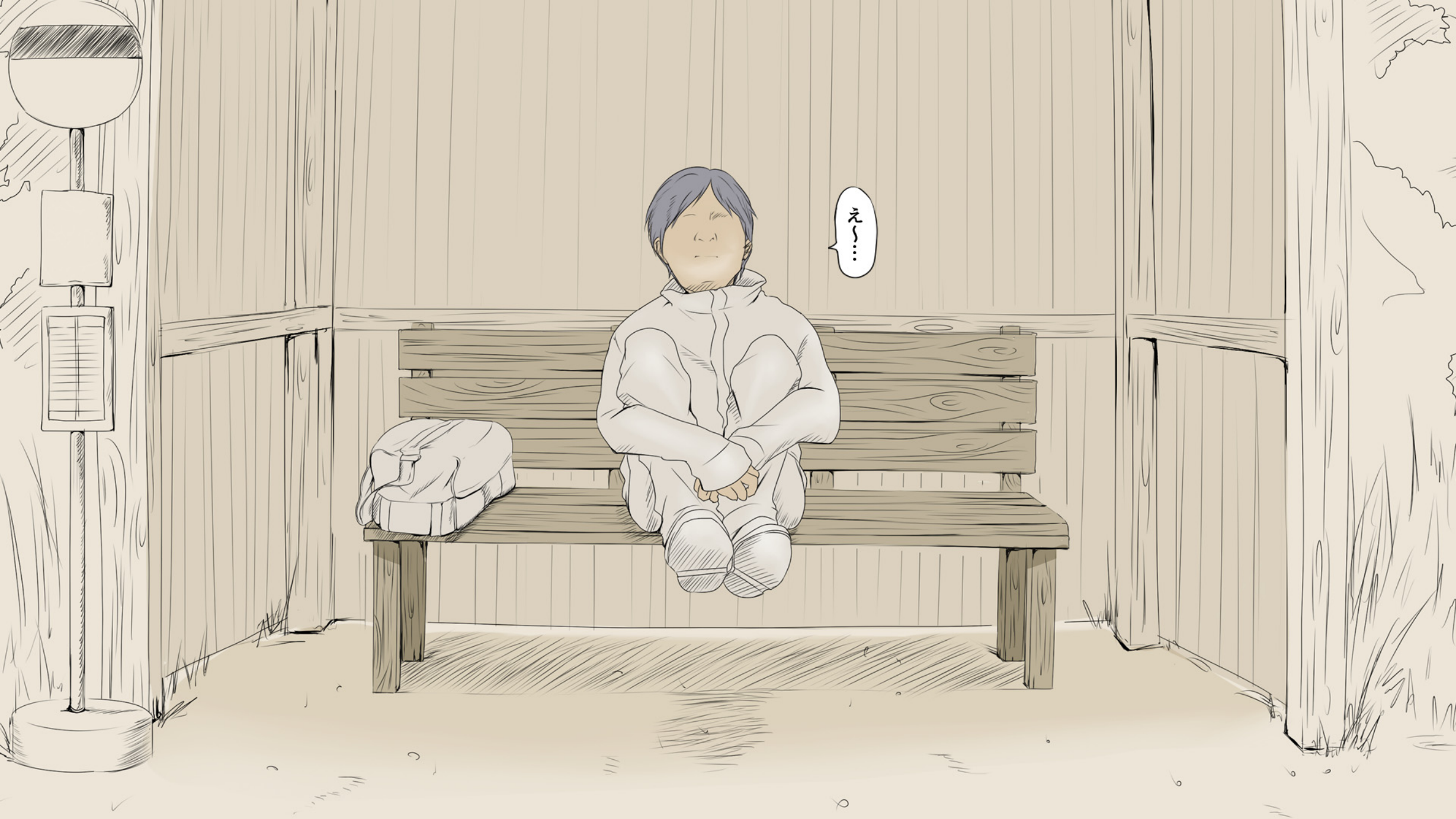




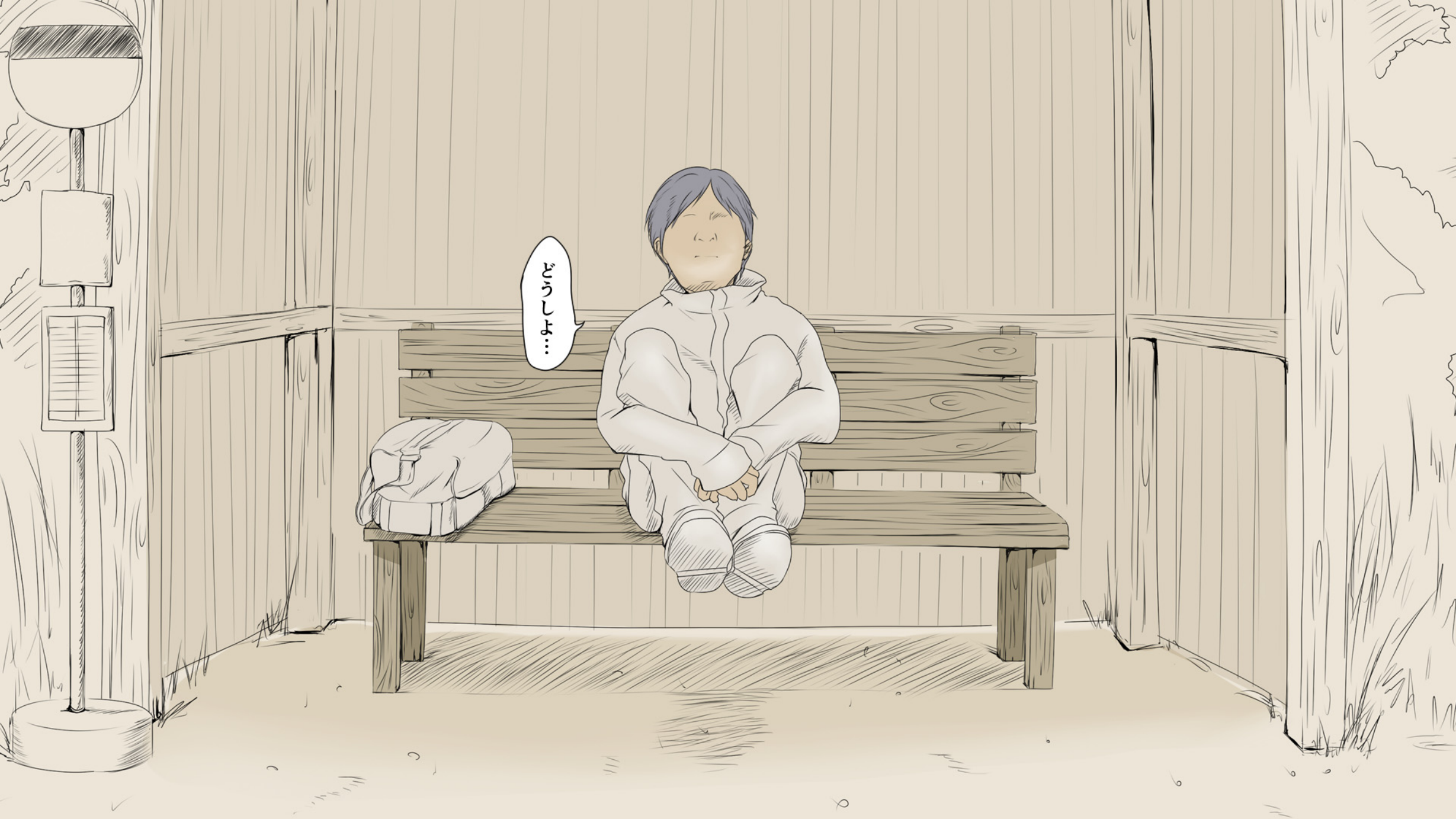
16時って...

なるんで
思ったかなあ

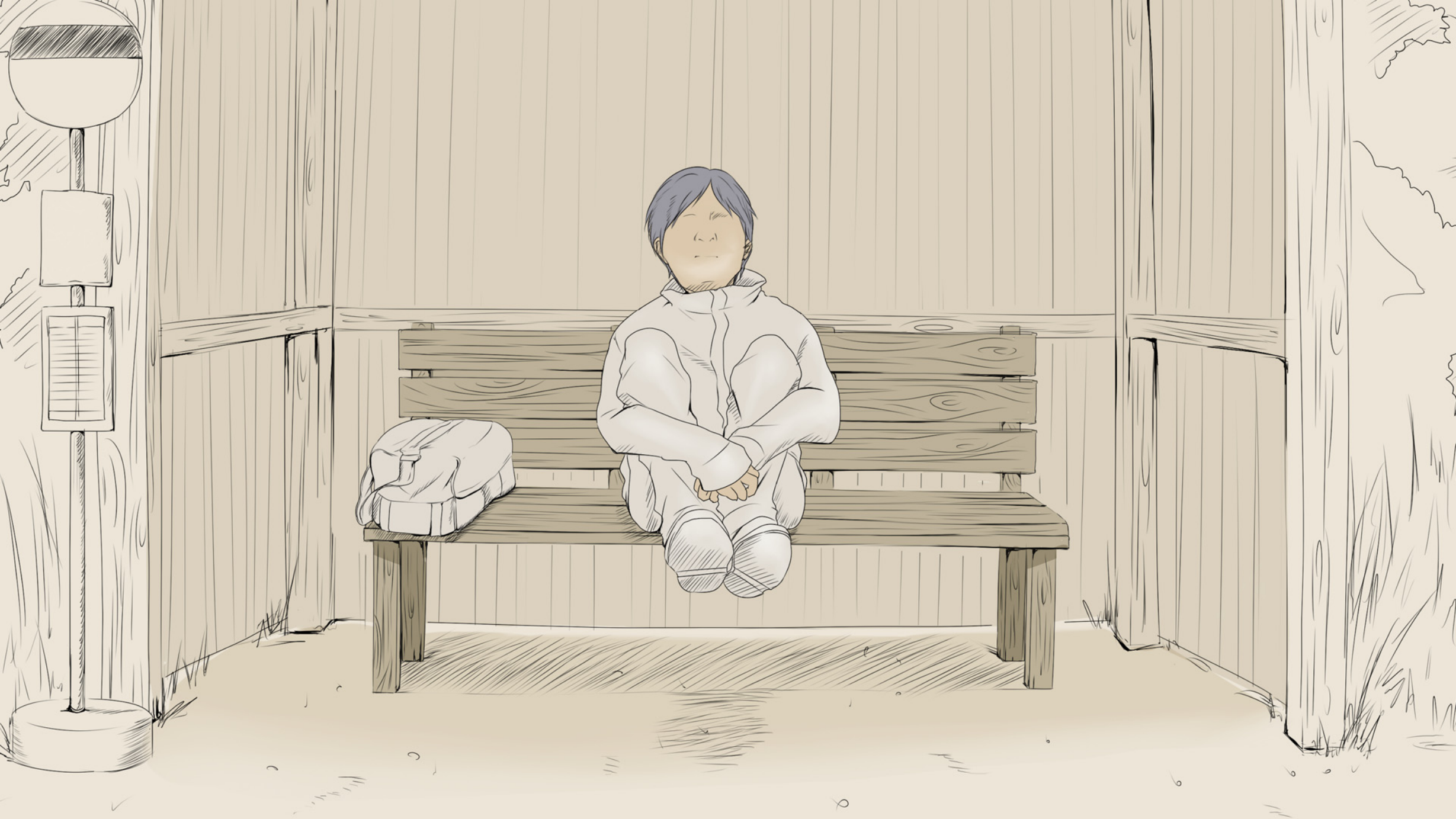


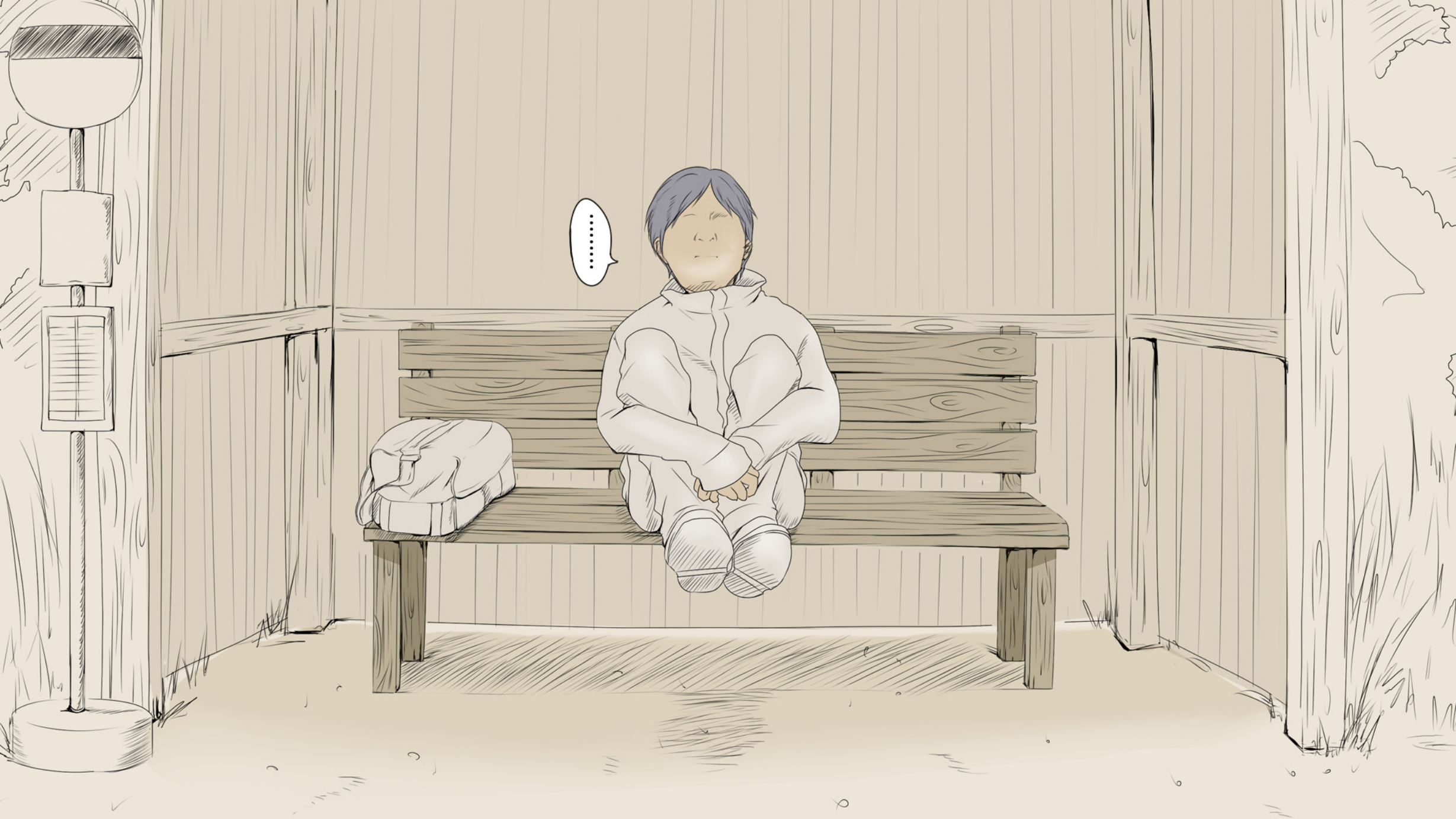


え〜…

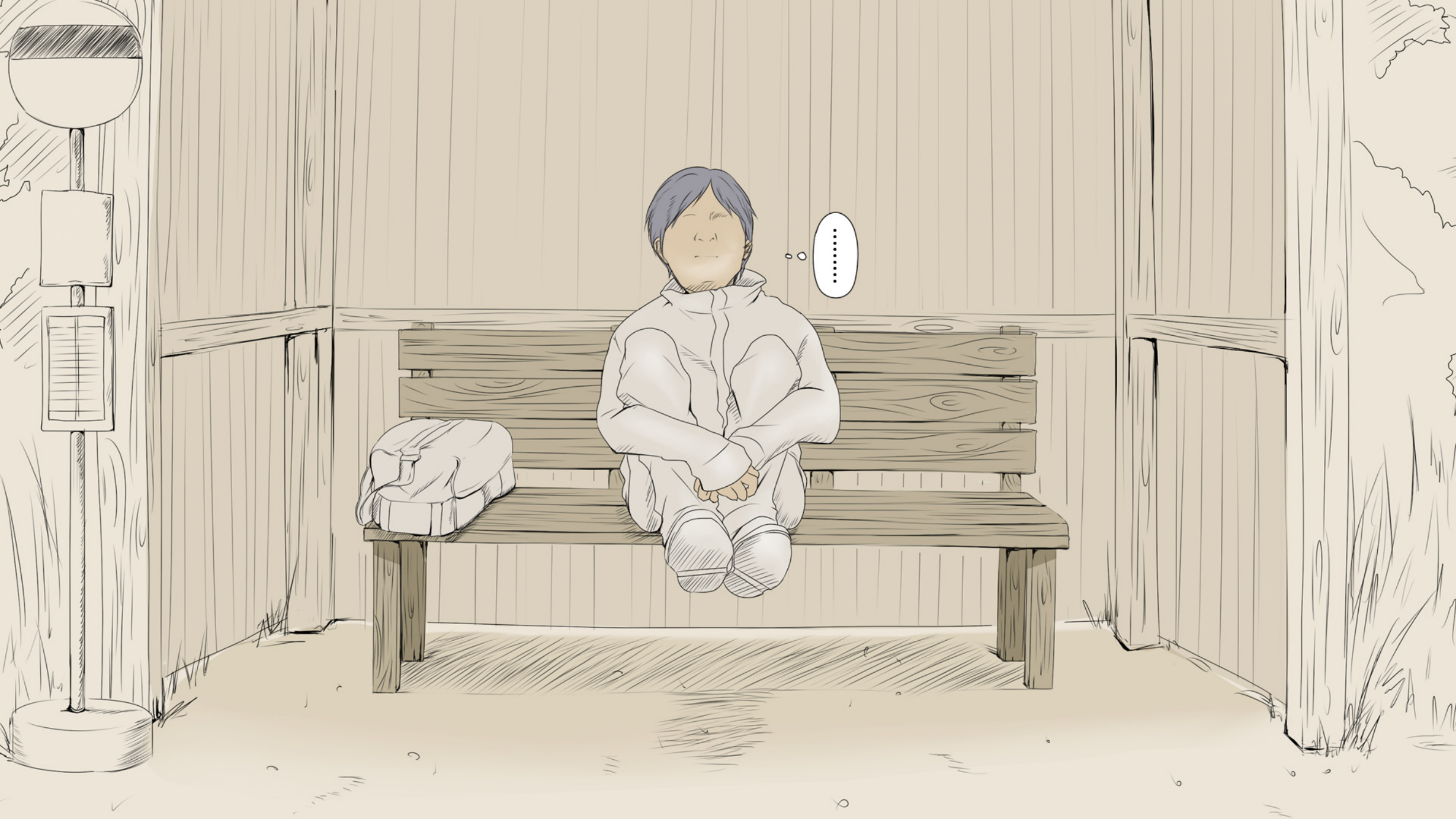


...9222









これだよこれ

喧騒から離れて
のどかな空気の中で
おだやかに流れる時間に
身をゆだねる

ゆだねるう

今朝

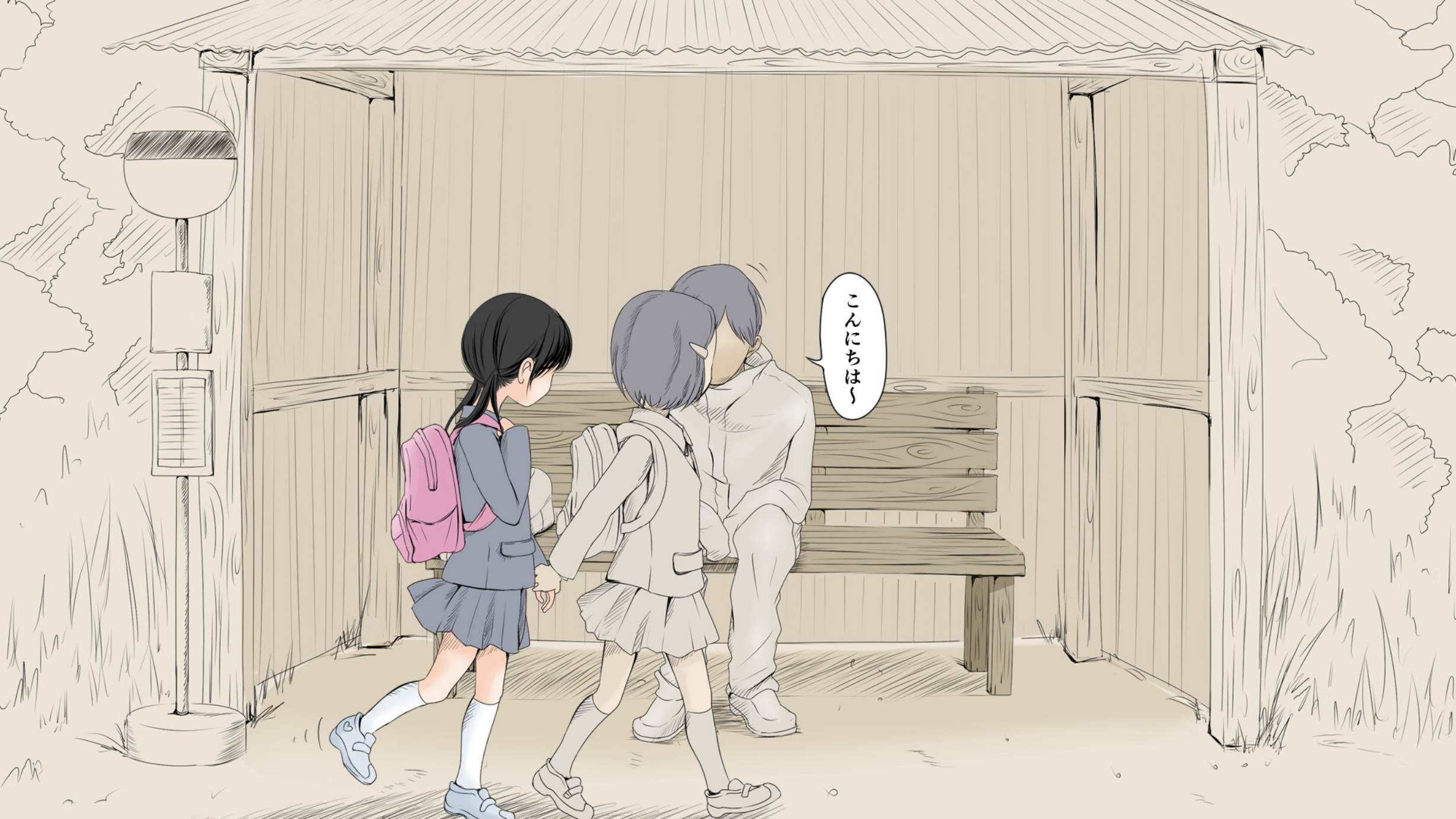






アホだ





こんにちは



5/25/20...





はあ、あ

今年のゴールデンウィークも
休み返上で仕事に追われ
あつという間に5月の下旬。

会社の方も落ち着いたので
たまった有給の消化も兼ね
田舎巡りなどに赴いてみた。

閑散とした土地柄を選び
あえて何もない場所を
気の向くままに散策し
自分を見つめなおす…みたいなの

なんかそんな感じになったら
いいなあって思ってたんだけど

ここはそういうのに向いて
なかったです。

本当に何も無いんだもん。
何も無さに遊びがないというか。

言ってもね

そのつもりで来つつも
意外な何かしらの遭遇に
小さな感動を賜りたいじゃない。

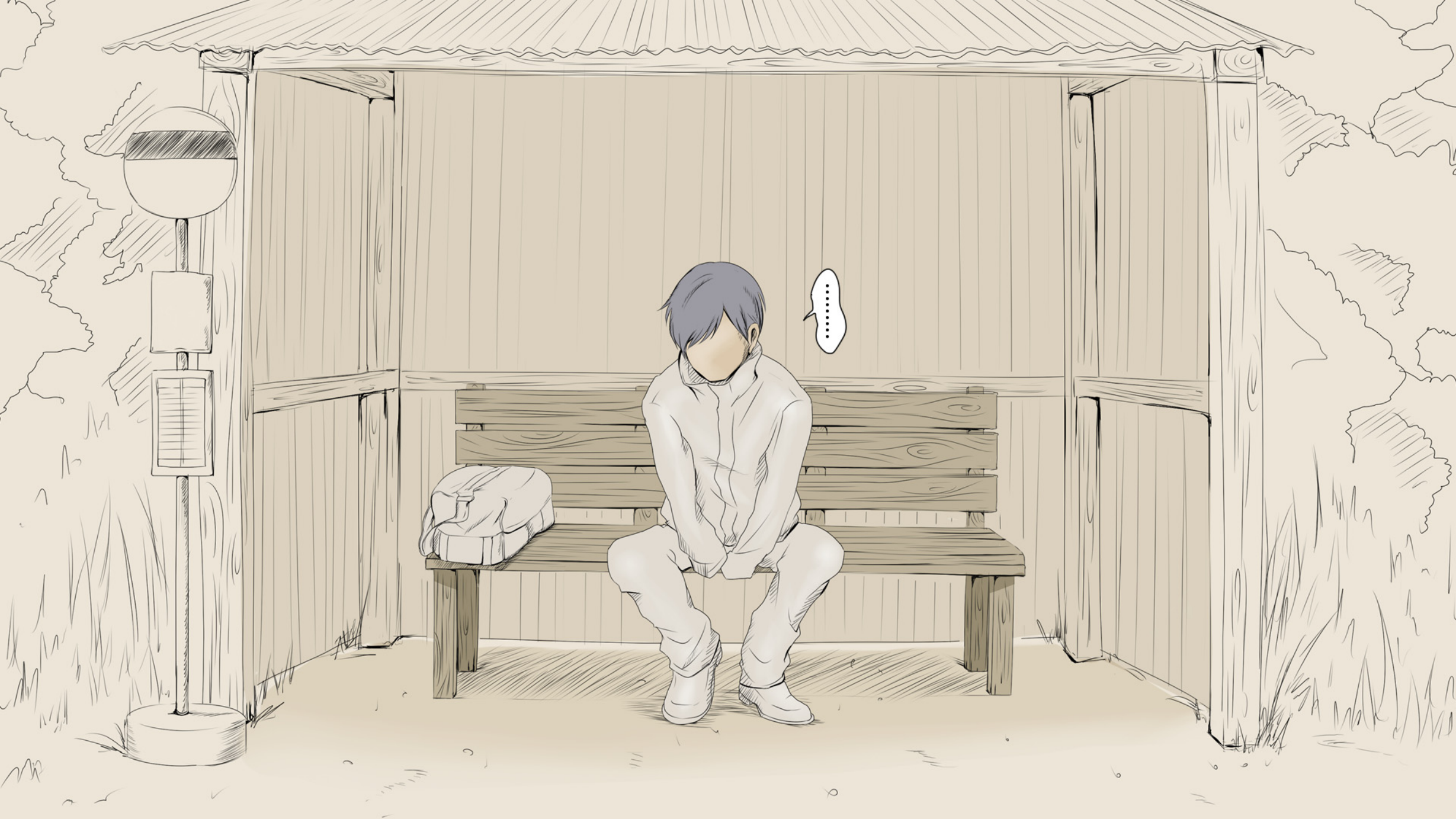
無いんだもの

特筆すべき物事が。

結論としては
家に居てマイ○ラしてた方が
良かった。

村人なんであんなに
鼻長いん…？

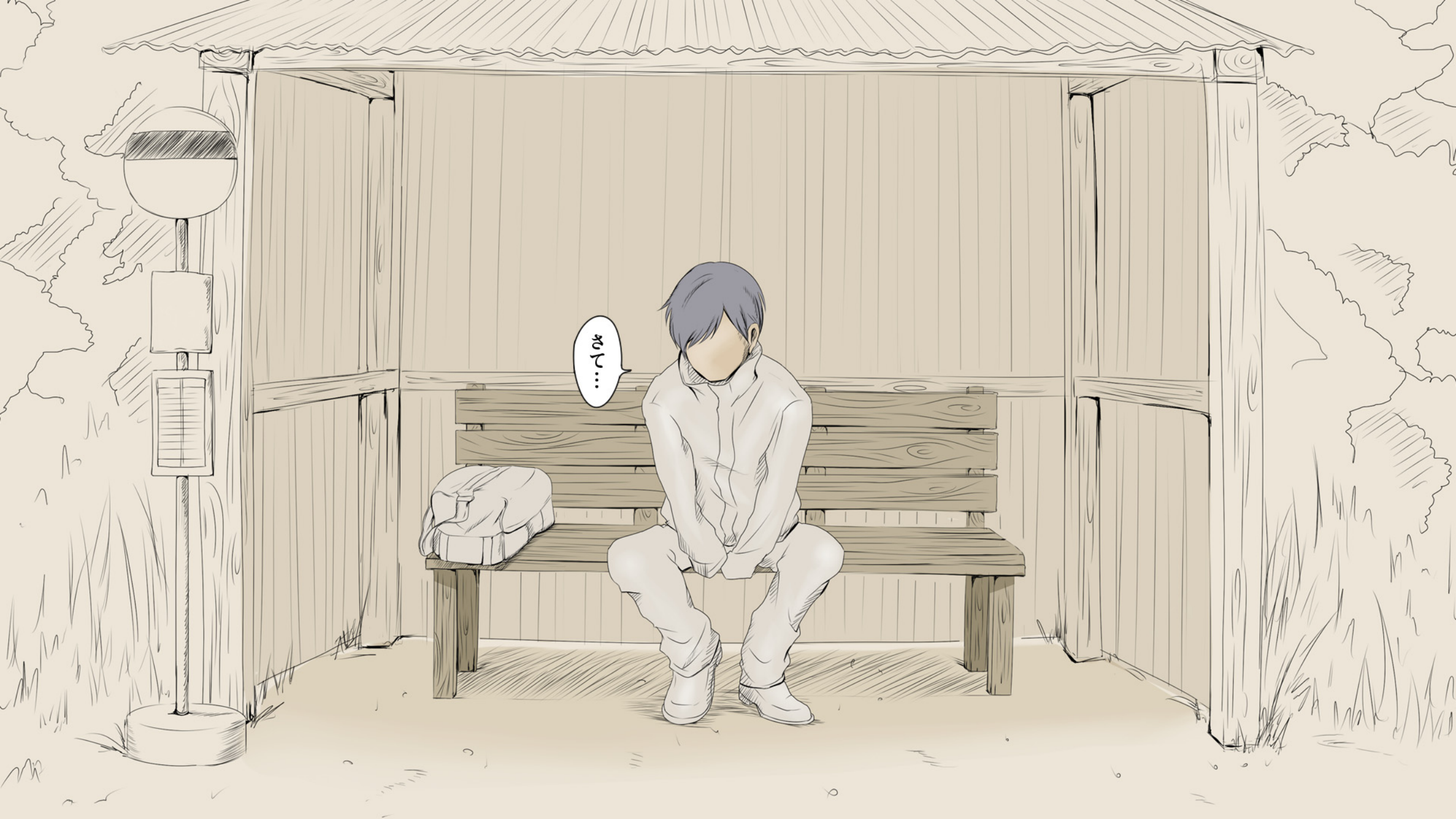






カア

ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ



...ん...

そろそろ真剣に考えよう。

5000円ぐらいかかるだろうけど
タクシーで町まで戻るか

あるいは
バスの始発までここで過ごすか。

簡易寝袋もあるし

気候的にはこのベンチで

一晚過ごせたくないけど

いかんせん食料を

持ってないんだよね。

だから野宿するなら

退屈な時間を朝まで腹ペコで

過ごさなきゃならない。

水も
もない！

無駄金

空腹ビバーク

この2択…

「迷うな〜

どっちも嫌で…」

「あ、あの〜…」



「え、こんにちは……」
「……あ、ああ……」
「こんにちは。」

さっきの女の子だ。

走って戻って来たのかな？
息が切れてる。

「もしかして泊まるところが
ありませんか？」

「うん。そうなんだよ。
バス間に合わなくてさ
どうしようかなって。」

「ひよっとしてどこか
教えてもらえる？」

「……はい……」

「あの、うちなんですけど…」

民泊やってるんです。

良かったらど、どうですか？

狭いトコですけど…」

「ほんとっ!？」

「せ、狭いし汚い、で、ですよ？」

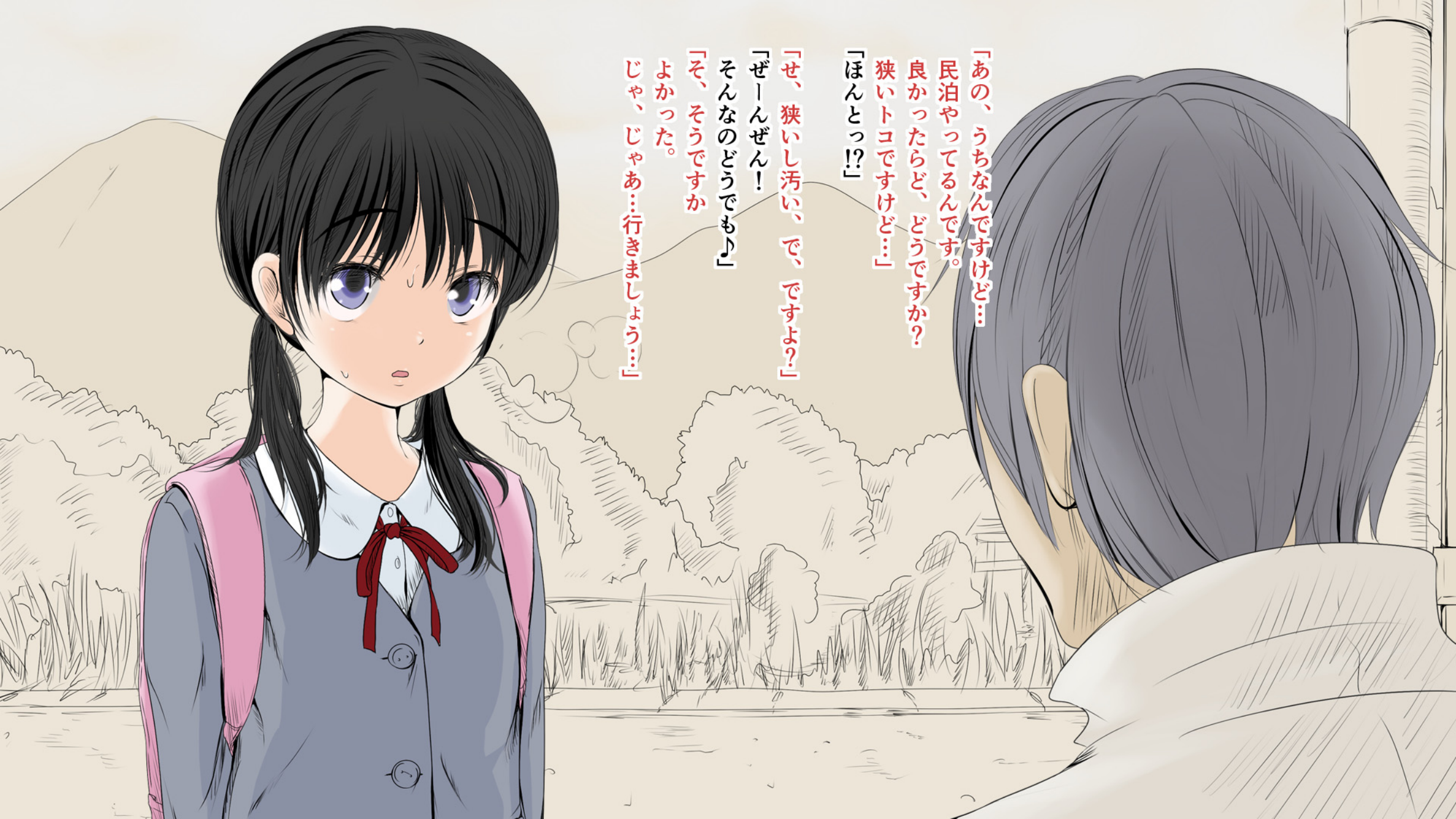
「ぜーんぜん！

そんなのどうでも」

「そ、そうですか

よかったです。

じゃ、じゃあ…行きましょう…」



「いや、助かったよ！
バス停で野宿しようか
迷ってたトコだったんだ。」
「あ……それはやめた方が
良かったと思います。」

「やっぱり誰かに叱られちゃうかね？」
「い、いえ……近ごろ夜中にイノシシが
出るって聞きました……」

「うわ……イノシシか……」

「な、なに？」

「うん」

僕のおばあちゃん家も
ここみたいなへん、
のどかな田舎でさ
イノシシや猿なんか普通に
その辺に居たの。

で、小さい頃に襲われた事が
あるんだよね。

ドドドドカッ

……で肋骨2本だよ。」

「それは大変っ！
肋骨ってこの骨？」

「そう、ここ。
すごい痛いよ。痛いし
ほら肺の上にあるでしょ？
息するたびにビリッて激痛が
走るからね。」

「……イノシシって本当に
怖い生き物だったんですね。」

「そうだよぉー
きみも気をつけなよぉー？」





大丈夫ですよ

野宿なんて
しないもん♪

いや
そうじゃなくてー

この子笑うとかわいい。

僕にもこの子よりちょい上の娘がいるけど
もうこんな顔見せてくれない。

やっぱり■■の笑顔っていいなあ。
見てるだけで楽しくなる。

「ねえ、きみ名前なんていうの？」

「あ…」

「**ロクハラアカリ**っていいいます。」

「ろくはらって

六波羅探題の六波羅？」

「はい。」

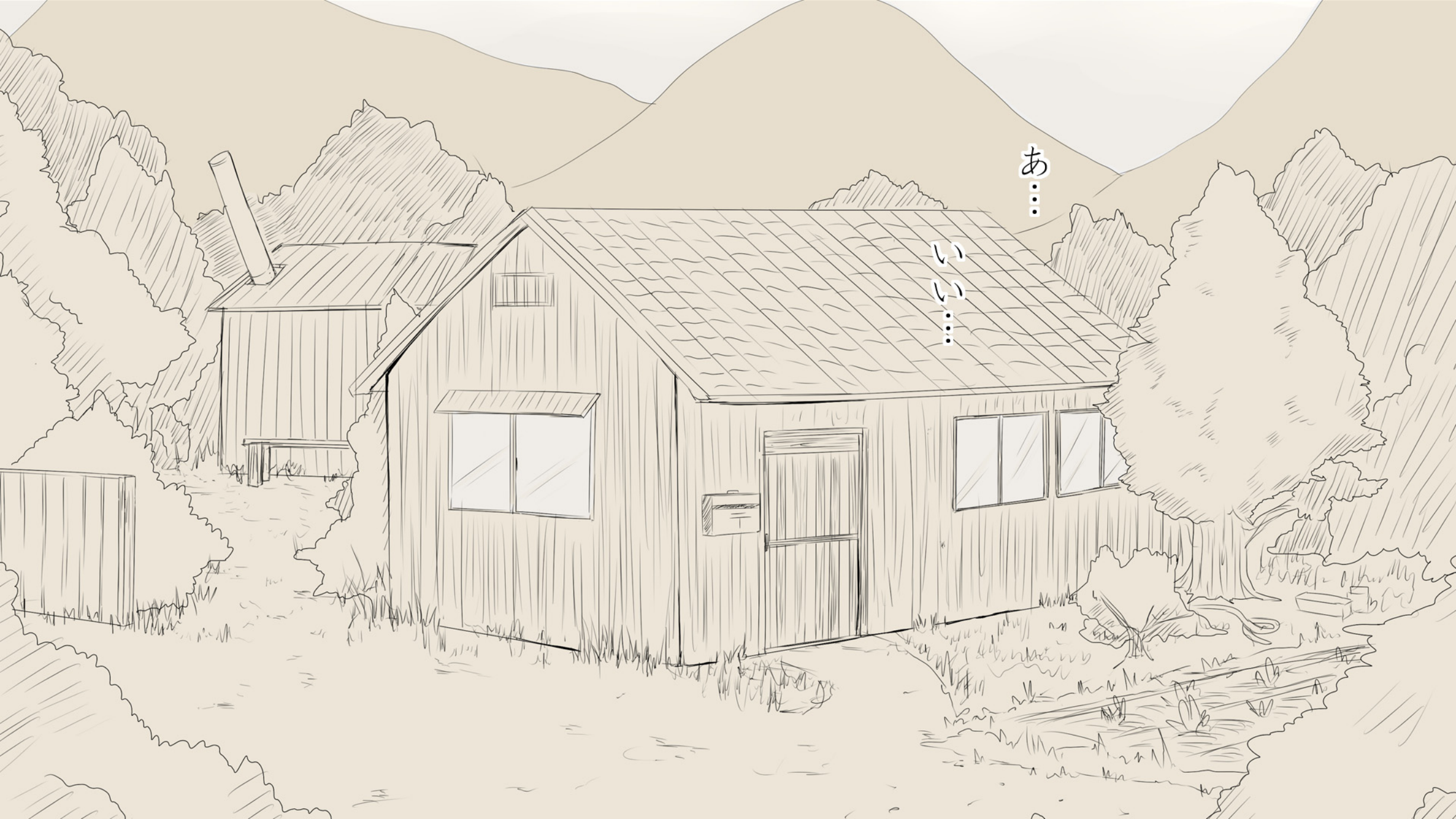
「へえ、なんだかおとん厳かな苗字だね。」

「おご？」

「あ、見えました。」

「あれです。」

「……………」



あ
…

い
い
…

じゃあ話して
来ますので
ちよっと
待っていてください

うん
分かった





このお家、なんか
僕のおばあちゃん家と
似てるなあ…

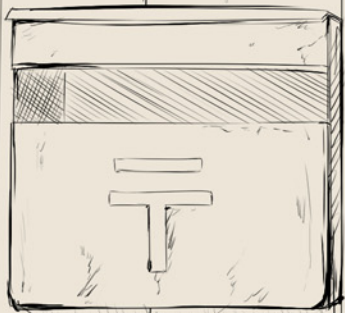
いや、似てるというか
原風景というやつ？

ディテールは違うんだけど
なぜか懐かしい気持ちになる。

……おばあちゃん……
僕にあまあまだった
おばあちゃん。
小さい頃よく泊まりに行って
たっけなあ…

「……………」

ふふ…
出来事、起きたね。

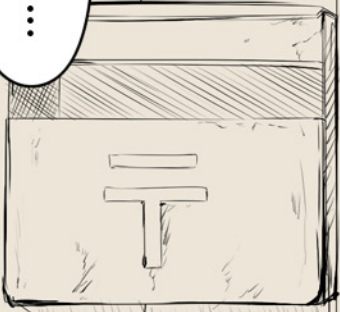






.....

.....



(!:)おや?
遅くない?
こんな時間かかる?)

「……ん?」

まって。

話して来ます?

なんか引つかかる

言い方しなかった?

……これもしかして

あの子が勝手に泊まれるって

言ってるんじゃないのかな?

……そうだよ……

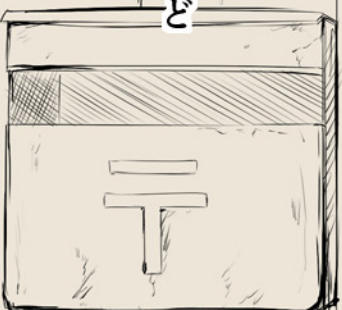
民泊って近頃は

サイト登録してるよね?

来る前にざっと調べたけど

この近辺にそうゆうの

無かったはず……



あらら…これたぶんアレだ…
困ってる人を
なんとかしようとしてるんだ。

僕が家主の立場だったら…
うん、民泊やんない。

辺ぴな土地で ■ 学生の娘が居る家だよ？
得体の知れない見ず知らずの人怖いもの。

(きつとそうだ。
あの子が勝手に言うてんだ…)

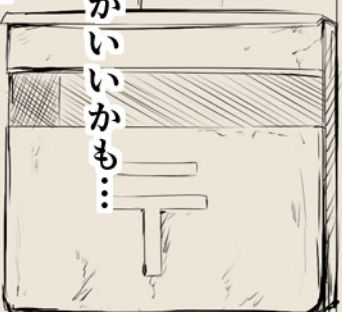
話を通してないなら親御さんとは
非常によくはない雰囲気になるよね。

こわもて
強面の父親に凄まれて
常識を疑う発言とか勘弁願いたいです。

「……………」

あの子には悪いけど…
これ黙って立ち去った方がいいかも…

「よし、そうし、あ…」
(しまった…戻ってきた…)

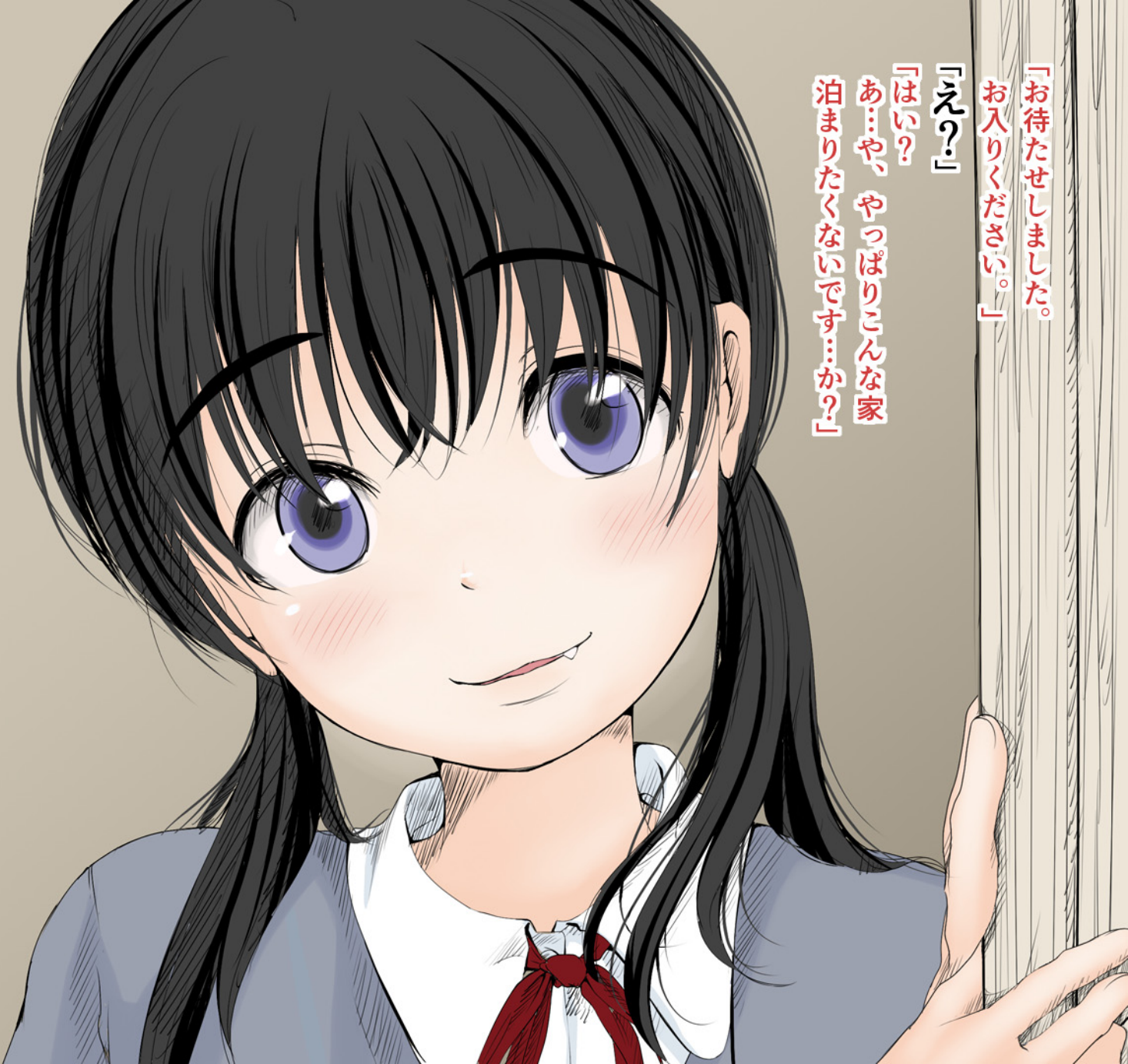


「お待たせしました。
お入りください。」

「え?」

「はい?」

あ…や、やっぱりこんな家
泊まりたくないです…か?」



「いや違う。」

そうじゃない、違うよ。」

「?」

「ご家族はみんなOK?」

「うちおばあちゃんしか

居なくって、もちろんいいと…」

「そ、そうですか…」

家がぼっん

(この環境とその家族構成で民泊…?)

悪い人が悪い事し放題じゃないの…?)

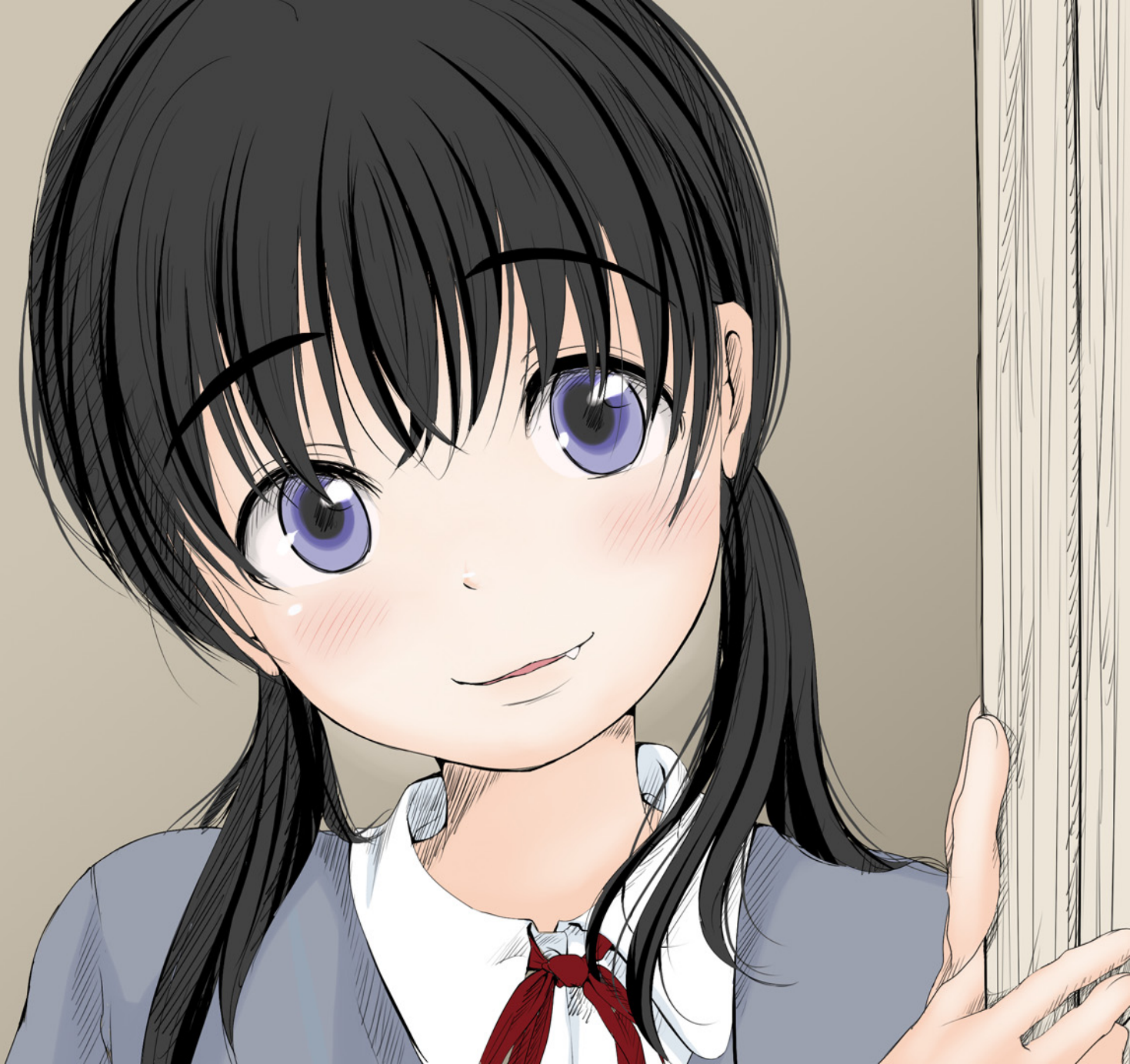
「な、なにか気になりますか…?」
「い、いや…そういうわけじゃ…
ないんだけど…」

「じゃ、じゃあ…あの…ど、どうぞ。」

「それじゃ…
お言葉に甘えてお邪魔致します。」

なんだかモヤっとした
後ろめたさが残るけど
良いというんだから
いい…んだよね。
こっちも別に悪い事しようと
思ってる訳じゃないし。

よし、「頭切り替え」
初めての民泊。
心置きなく賜ろう。



一幕

ハートウォームオペレーション♪

冒頭のお話でした。
少しだけですがえっちシーンを
引き続きご覧くださいませ。



うん

あつあつ
あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ
あつあつ

うん

うん



おばあさんの動向を耳で探りながら
あかりちゃんの恥部を撫で続ける事数分…

布越しに伝わる柔肉の感触
存分に捏ねくりたいその衝動を抑え
触るか触らないか
そんな力加減で愛撫する

あかりちゃんの手は
僕の腕をぎゅうと握っている
対して太くもない前腕が
力強い男のソレに見える
それほどに彼女は小さい。

「はっ……あ……っ……く……」

少し生地の厚い子供パンツ。
気がつくことややしっとりしてやる

湯上りだからなのか
女性反応の結果なのか…

動きや声からはあかりちゃん
今どんな状態なのか判断できない。

皆さんあのね

っで感じてるかどう
わからないです

「ど…どうか…な…あかりちゃん…」
「はっ……ん……っ……」

声をかけても小さくうなずくだけ
痛くはないとしても
気持ちよくもなっていないんじゃないか…？

(今日の為に一人えっちで練習して
くれているとは言っただけど…
ど、どうなのかな…
ちゃんと聞いた方がいいかな…)

手を止めて確かめようと
思った時…

「はっ……あ……っ……く……」

『イ、イクっ!?
あかりちゃんイクっ?』
『うっ……うん……あっ……』

（ゾゾゾゾゾゾ…）

興奮っ
罪悪感、興奮っ！

よそ様の [redacted] を不適切な年齢で
男性からの絶頂経験をさせる背徳と
好きな女の子を果てさせる悦び

この子の囁くささやくような一言で
突如跳ね上がったそれら感情が
ない交ぜになって襲ってくる

『あっ……うん……あっ……』

小さな両手を固く握り
果てそうな刹那それでも声を
必死で抑えているあかりちゃん

『ん、んク?』

『あかりちゃんいくのっ!?!』

うわずっで

バカみたいに同じ事を聞き返す僕

『う……ん……あっ……あっ……あっ……あっ……』

しいいしいい

しいいしいい

びんびん

汗を噴出しビクンッビクンッと
跳ね始める身体

(あ…ああ…)

僕、あ、あああ、あかりちゃん、
イかせ…るっ！

得も言われぬ多幸福感に^お圧され
勝手に速まる僕の手は
あかりちゃんのか弱い部分を
優しく、しかしこれでもかと
コネあげる

シ…ン
くんっっ

「はあっ…はっ…はっ…はっ…はっ…！」

呼吸がだんだんとテンポを上げて



「あッ…あッ！」

「ああんっ……！」

ビクッ！

両足がぴよこんと跳ね
よがり顔を月光に晒す

舌つ足らずな嬌声が
静まり返った裏庭に響いた

レレレ

レレレ

レレレ

「……っ……」

「……はっ！はっ！はあっ！」

息を呑み硬直、そして荒い呼吸

「はあっ……はあ……んっ……はあっ……」

全身の力が抜け
びくびくと痙攣しながら
からだを駆け巡る何かに耐え

「はあ……はあ……あん……はあ……」

余韻を……味わう……

人が達した時のそれら全てを
今この子に見ている……

「……イ、いった……学生……」

し、学生……なのに……ほんとに……

「……いった……」

「はあ…う、動かしちゃだ、だめっ！」

手を引こうとしたら

続けると思われたのか腕を抑えられた

従い僕はじっとして居る…

「はあっ…はっ…はあ……」

「……」

「…な、なるって…人で…

おもわな、なくて…

はあ…はあ…」

「うん……」

涙をいっばいに溜めで
驚いたように見つめてくる
あかりちゃん
(そっか…だよね…)

覚えて間もない頃つでさ
ただいくだけでも難しいのに
他人でなんてね…

僕は未だに女性に手でされて
いった事ないし
驚くの分かる…

「ぎ、気持ち良かった？」

「度小さく頷き

『……きもち……んっ……い……』

整わない呼気…喋りながら
またビクン…

そして明確に肯定。

僕の指先はまだあかりちゃんの
アレに触れていて
蒸れたような熱気が伝わる…

（クリトリス…すごい固い…
コリコリだ…

やつぱ
当たり前だけどこの突起
笑っちゃうぐらい小さい…

…じゃ、じゃあ…膣内は
ど、どんな感じなのかな…
のって…ど、どんな感じ…

「あ、あの…今度は…
な、中も…触ってみても……」

『……』
じーっつと見つめながら
小さくコクリと頷いた

「え……は……ず……かしい……」
「う、うん……でも……」
ね……持って……」

一度イッたとは言え
まだまだ羞恥心の強いあかりちゃんに
自分のパンツをめくり上げさせる

「!!」

(し、滴るほど……濡れてる……
うそ、こんなになるの……?)

学生なのに……?)

じい

「(入れたら) い、痛い……かな……?」

うつむいてプンと首を振る

(そ、そ、そ、そ、そっか
キミ指入れてる? って
聞いたようなもんだっ)

自分が何言ってるのか分からなく
なってきた……

(え、えとじゃあ平気……かな……?
指くらいなら)

へ、平気なんだね?

い、入れちゃいますよ……?)

しるお♡

ぶつくりと弾力のある2枚のお肉
その裂け目をなぞり入り回であろう
わずかな窪みを見つけた

温かに滑る液体が
僕の指先を援護して

つぶっ！

「あっ！……ん……」

「せりりりまるりー！
狭いっ！」

妻のソコが脳裏によぎるも
全く異なる規格。

ペニス挿入には絶望的と言える
肉圧の隙間を縫い
中指の爪1枚分
1cm程の深さまで侵入した。

痛がる様子はまるでなく
むしろあかりちゃんの息遣いから
もっと入れて欲しい
そんな促しすら感じる

じゅっぽ……じゅっぽ……じゅっぽ……

「はっ……あ……うっ……あ……」

(おおっ……おおっ……おおおおお…)

指先から伝わるびるびるとした
肉ヒダの感触が
抑えた嬌声と共に僕の全身に
滲みこむ

指を抜くたび挿し込むたびに
ズボンの中で硬直しきったペニスが
ピクンピクンと昂ぶる

じゅっぽ
じゅっぽ
じゅっぽ

この腔肉の触り心地だけで
頭も股間も爆ぜそうに
なりながら
指先だけは紳士的に
優しく愛撫を繰り返す…

「んっ……んん……あ……はっ……」

少しずつ喘ぎのリズムが
整うあかりちゃん

()の性器が
物の抜き差しで…感じてる…)

「あ……かりちゃん……あかりちゃん……」

「は……い……あ……ん……あ……っ……」

「あかりちゃん……あかり……あかり……」

「あ……あんっ……あんっ……あ……っ……」

魂の奥から湧く何かの思惟は

この子の名前へと収束し

僕ではない誰かがあかりあかりと連呼する

小さな体をぎゅつと抱き寄せ

喘ぎに合わせ中へ中へ腔奥へ

「あかりっ……あかりっ……あかりっ……」

「あッ！あッ！あッ！あッ！あッ！」

この子のあるこは僕の指の

第二関節程まで咥えて

だらだらとよだれを垂れている様

気がつけばさっきまでの■な腔が

快樂の肉穴へと変貌わっている

「見て……あかり……が……」

僕の指と……セックスしてる……」

「あっ！やあっ！あっ！

あっ……あんっ！」

大腿を夜空へ拡げ指挿入に喘ぐ女子 ■学生

抜き差しだけじゃなく左右に振ったり

回したり……

彼女の腰は無意識に僕の指を追いかける

「なんかしとりましたか…?」

「(はぁ…はぁ…)は、はい?いえ…」

お風呂から出てきたおばあさんが
僕らを「いっしょくっ」一瞥して直球で問う

「……………ほうですか…」

「……………」

突然の事に

言葉が口から出てこない

とっさにあかりちゃんの前^{まへ}に立てただけで
おばあさんの視線がどこにあったかまで
確かめる余裕はなかった

(み、見られた!?)

声はっ!?
声聞こえてたっ!?

(あああああっ!!もうっ!!
くっぞっ!!やっっちゃった!!うかう!!
……………ますっ事になるか?これ……………)

「……………ほのびや次入ってくだされ…」

「は、はは…」

「あかりちよっこと来んさぢや…」

「えっ…あ、うん…」

四幕

寝ない子どもはどこだ？


体験版はここまでです。
試読して頂きありがとうございました。

製品版の方も
どうぞよろしくお願ひ申し上げます。